

NEWSLETTER

No.11

2004年5月22日

会長 小泉保

事務局 〒594-1198大阪府和泉市まなび野1番1号 桃山学院大学 林 宅男 研究室内

Tel.0725-54-3131 (代表) FAX 0725-54-3202 E-mail: thayashi@andrew.ac.jp

URL: (<http://homewww.osaka-gaidai.ac.jp/~sugimoto/PSJ/>)

郵便振替口座 00900-3-130378 口座名:日本語用論学

★ 会員の皆様、お変わりありませんか。日本語用論学会Newsletter第11号をお届けします。さる3月25日に、第18回運営委員会が開かれました。この号は、そこで討議された内容をもとに編集されています。

★ 会長挨拶

憂国の志士吉田松陰は、人生には春夏秋冬があると述べています。彼は29年の短い生涯を終えましたが、松陰の活動の軌跡を追っていくと、たしかに、その一生に凝縮された四季が認められます。こうした春夏秋冬の別は、人生だけでなく、人間が営む組織、すなわち、国家や会社、それに学会にも当てはまると思います。

平成10年(1998年)に発足した日本語用論学会も、第1回の旗揚げ大会を関西外大で行ったあと、第2回が立命館大、第3回が神戸外大、第4回が桃山学院大、第5回は振り出しの関西外大に戻りました。昨年の第6回大会を神奈川大で挙行し、念願の関東進出を果たしました。本年度の第7回大会は、甲南女子大で開催の予定です。

今年から、事務局長を林宅男氏、編集委員長を澤田治美氏が担当し、学会も次のような組織に別け、それぞれに委員長を配し

て責任の分担を明確にしました。

事務局、編集委員会、大会運営委員会、事業委員会、広報委員会

日本語用論学会も、ようやく種まき、田植への春耕を終えたと思います。これから炎天下の草取りが始まります。こうした夏季の労苦の先に収穫の秋が期待されるわけです。

先日、韓国からの留学生から、日韓両語を比較したレポートを求めたところ、韓国では、談話の間で相づちはめったに打たないという報告がありました。

相づちは、語用論の立場からすると、重要な事柄です。相づち言葉は、もちろん言語によって様々です。フィンランド語では、「ヨー、ヨー」もしくは「ニーン、ニーン」です。後者の言い方は外国人の耳に障るので、『フィンランド語は猫のことば』という本を書いた人がいます。

このように、相づち言葉をどのように打つかという比較研究も意味のあることですが、どこで打つかということは、言語伝達の上で、対人関係を左右する重要な事項と思います。

とにかく、語用論学会も夏耕期に入りました。会員の皆さんのご協力をお願いいたします。

日本語用論学会会長 小泉 保

★第6回大会成功のうちに終了

日本語用論学会第6回大会は2003年12月6日(土) 神奈川大学・横浜キャンパスで開催されました。参加者は162人にのぼり、語用論に対する関心の高さをうかがわせました。会場をお世話いただいた神奈川大学の伊藤克敏先生をはじめとする諸先生方、司会の先生方、ならびに院生・学生の皆様に心から感謝いたします。

10時から12時05分まで5室にわかれて個人発表3室(発表件数14件)、グループ発表2室(発表件数7件)のワークショップが行われました。各部屋では、和やかなうちにも活発な議論が行われました。

12時30分から第6回総会が開かれました。小泉会長の挨拶に続いて、事務局報告、編集委員会報告、会計報告がなされました。

1時から3時30分までA室～D室に別れ、各会場4件、計15件の研究発表が行われました。どの会場も活発な質疑応答がなされました。

3時45分から6時過ぎまで、「第2言語習得語用論—異文化間語用論の視点から—」(司会:伊藤克敏、講師:関山健治、村田和代、高橋里美、コメンテーター:西光義弘)と題して、シンポジウムが開催されました。語用論と第2言語習得論について、熱気に満ちあふれた充実したシンポジウムとなりました。シンポジウムの内容は今年の『語用論研究』第6号に掲載の予定です。

大会終了後、懇親会が開かれました。終

始笑い声の絶えないなごやかな会でした。次回第7回大会(2004年12月11日(土))は、甲南女子大学で再会することを約して散会しました。

★第6回大会総括

1. 参加者	162名
現会員	121名
新入会員	17名
当日会員	24名
2. 懇親会参加者	40名
3. 第6回大会運営費内訳	
人件費	155,000円
事務局費	59,116円
郵送代	28,370円
印刷代(プログラム・模造紙 Program & Abstracts)	288,180円
懇親会費	230,000円
合計	760,666円

★2003年度の会計報告

本学会の会計年度は毎年3月末日となっています。昨年度の会計報告は以下の通りです。会計監査委員より監査を受けました。12月の大会の時に承認していただきます。

2003年度(平成15年度)会計報告
(収入)

前年度繰越金	2,336,260円
会費(306口)	1,224,000円
学会当日会員会費	59,000円
懇親会費	120,000円
Program & Abstracts	
売り上げ	199,000円
『語用論研究』バック	
ナンバー売り上げ	43,000円
学会補助	150,000円
普通預金利子	76円
合計	4,131,336円

(支出)	
印刷費	
Program & Abstracts	210,315 円
『語用論研究』第5号	420,350 円
プログラム・大会模造紙・立て看板	
印刷代	70,855 円
郵送費	184,890 円
事務局諸費(会議費、学会当日諸費用 (雑費、消耗品など))	158,339 円
人件費(学生アルバイト)	155,000 円
旅費交通費	60,000 円
<u>懇親会費</u>	<u>230,000 円</u>
合計	1,489,749 円
<u>次年度繰越金</u>	<u>2,641,587 円</u>

★ 2003(平成15)年度予算

(大会が12月のため、毎年その年度の予算を大会時に決めております。以下は第6回大会で承認されました。)

(収入)	
会費(4,000円×300口)	1,200,000 円
当日会費	30,000 円
Program & Abstracts 売り上げ	
	180,000 円
<u>バックナンバー売り上げ</u>	<u>20,000 円</u>
合計	1,580,000 円

(支出)	
印刷費	
Program & Abstracts	180,000 円
語用論研究	400,000 円
プログラムなど	70,000 円
郵送費	150,000 円
事務局諸経費	50,000 円
学会当日諸経費(文房具、アルバイト代、 会場費、雑費、シンポジウム講師旅費、懇 <u>親会費補助など</u>)	<u>500,000 円</u>
合計	1,410,000 円

★ 次回大会開催校・研究発表募集

今年度の第7回大会は2004年12月11日(土)、甲南女子大学(〒658-0001 兵庫県神戸市東灘区森北町6-2-23 (TEL 078-431-0391 (代)) (<http://www.konan-wu.ac.jp/>))で開催される予定です。奮ってご参加・ご応募下さい。

★大会「研究発表」・「ワークショップ発表」募集

第7回大会の研究発表、ワークショップ発表の募集をいたします。下記の要領でふるってご応募下さい。

<<応募規定>>

研究発表応募規定

1. 発表者は会員であること。応募者が会員でない場合、応募と同時に入会の手続きをすること。
2. 内容は当該大会時点で未発表のものに限る。他学会に応募中の発表内容を本学会に二重に申し込むことはできない。また、同じ年度に締め切りの『語用論研究』と同じ内容を二重に申し込むことはできない。
3. 発表要旨は、A4の用紙を用いて、余白を十分とり1行目にタイトルを明記し、25文字×30行で3枚以内にまとめて4部(コピーで可)を提出する。ただし、参考文献表は枚数に含めない。名前は別紙に書くこと。
4. 選考及び研究発表の割り振りは運営委員会が行い、結果は応募1ヶ月以内に応募者に通知する。
5. 別紙(A4)に、タイトル、名前、所属・職名、住所、電話番号、ファックス番号、e-mailアドレスを明記したものを添付する。名前には必ずふりがなをつ

ける。

6. 発表時間は一人 25 分以内（別に質疑応答 10 分）とする。
7. 応募締め切りは毎年 8 月 31 日とする。
8. 宛先
〒573594-1198 大阪府和泉市まなび野
1-1 桃山学院大学文学部 林 宅男
研究室 日本語用論学会事務局
TEL: 0725-54-3131（代）(E-mail:
thayashi@andrew.ac.jp (宛)。ただし、メールでの応募はご遠慮下さい) (封筒の表に「研究発表応募」と朱書きすること)

ワークショップ発表応募規定

1. 発表者は会員であること。応募者が会員でない場合、応募と同時に入会の手続きをすること。
2. 内容は当該大会時点で未発表のものに限る。他学会に応募中の発表内容を本学会に二重に申し込むことはできない。また、同じ年度に締め切りの『語用論研究』と同じ内容を二重に申し込むことはできない。
3. 発表要旨は、A4 の用紙を用いて、余白を十分とり 1 行目にタイトルを明記し、25 文字×30 行で 1 枚以内にまとめて 3 部（コピーで可）を提出する。ただし、参考文献表は枚数に含めない。名前は別紙に書くこと。
4. 選考及び研究発表の割り振りは運営委員会が行い、結果は応募 1 ヶ月以内に応募者に通知する。
5. 別紙（A4）に、タイトル、名前、所属・職名、住所、電話番号、ファックス番号、e-mail アドレスを明記したものを添付する。名前には必ずふりがなをつける。

6. 発表時間は一人 15 分以内（別に質疑応答 10 分）とする。
7. 応募締め切りは毎年 9 月 30 日とする。
8. 宛先
〒594-1198 大阪府和泉市まなび野 1-1
桃山学院大学文学部 林宅男研究室内
日本語用論学会事務局 TEL: 0725-54-3131（代）(E-mail: thayashi@andrew.ac.jp (宛) ただし、メールでの応募はご遠慮下さい) 封筒の表に「ワークショップ発表応募」と朱筆のこと。
9. グループでの応募も可能。その際は、一人一人の発表要旨、タイトルと、グループ全体のテーマを明確にすること。グループの代表者とともに、一人一人の名前、所属などの用紙もつけること。

応募締切：①「研究発表」の場合は 2004 年 8 月 31 日（火）必着とする（選考結果は 1 ヶ月以内に通知します）。②「ワークショップ発表」の場合は 2004 年 9 月 30 日（木）必着とする。選考結果は 10 月中に通知します。なお、前日に速達で投函されても地域によっては届かない場合もありますので余裕を持って応募されるようお願いいたします。締め切り厳守。事務局移転につき、宛先が昨年と異なっていますのでご注意ください。

大会予稿集の執筆について

研究発表、ワークショップ発表決定者の皆さんについては『予稿集』（これまで『Program & Abstracts』と呼んでいたハンドアウト集は他の学会にならいたこのように名称変更することになりました）の執筆をお願いします。研究発表は 8 枚以内、ワークショップは 4 枚以内です。締め切りは 10 月 31 日（締

め切り厳守)です。詳しくは選考結果通知の際にご連絡を差し上げます。

★『語用論研究』第6号投稿募集

学会誌『語用論研究』第6号への投稿を募集しています。投稿規定は『語用論研究』第5号と学会のホームページに記載されているとおりです。多数のご応募をお待ちしています。以下の要領でご応募下さい。締め切りは2004年8月31日(火)です(研究発表応募と同じ)。

<<投稿規定>>

1. 投稿は会員に限るものとする。(会員でない場合は、応募と同時に入会手続きをとること)。
2. 投稿論文は未公開の論文であること。ただし、すでに口頭で発表したものなどに相応の修正・加筆を加えたものは、審査の対象になる。同じ年度の日本語用論学会大会で発表が予定されているものは、発表前の投稿を認めない。また、応募の際は、本人と分かる書き方はできるだけ避ける。
3. 使用言語は原則として日本語または英語とする。
4. 投稿締め切りは、毎年8月31日、採否決定を10月末日、刊行を12月とする。
5. 枚数、書式など。
 - a. 原稿枚数：A4、横書き、15枚以内(注、参考文献を含む)。
 - b. 書式：1ページ、日本語の場合は2行×38文字とする。英語の場合は1ページ、1行70ストローク、1ページ32行とし、フォントの大きさを小さくして大量のストローク数になることは避ける。注や、参考文献の活字を小さくしない。ただし図表の挿入は可能。
 - c. 原稿の1ページ目はタイトルのあと1
- 行アケで氏名、そのあと2行アケで本文を続ける。ただし、採否決定前の投稿論文そのものには氏名を書かない。
- d. 例文と本文の間は1行アケル。
- e. 各節の前は1行アケル。
6. 注は参考文献の前にまとめて付ける。
7. 参考文献(参考文献、引用文献という言い方はしない)の書式は以下の例にならうこと。

Grice, H. P. 1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

Hopper, P.J. 1979. "Aspect and Foregrounding in Discourse." In T. Givón ed. *Syntax and Semantics 12: Discourse and Syntax*, 213-241. New York: Academic Press.

小泉 保. 1990. 『言外の言語学—日本語用論—』東京：三省堂.

野崎 昭弘. 1995. 「言葉と言葉の間」『月刊言語』(2月号) 62-69. 東京：大修館.
8. 提出部数：原稿は6部提出する(コピーで可)。
9. 氏名(ふりがな)、郵便番号、住所、所属、職名、連絡先電話番号、FAX番号、e-mailアドレスを別紙に記入する。
10. 送付先：〒573-1001 大阪府枚方市中宮東之町 16-1 関西外国語大学 澤田治美研究室内 TEL 072-805-2801(代) (「投稿論文在中」と封筒の表に朱書きする)
11. 掲載決定後に、最終原稿の入ったフロッピーディスクと完成原稿を提出する。フロッピーディスクは返却しない(送付先等詳細は、掲載決定者に別途通知する)。

<<注意事項>>

(1) 研究発表、ワークショップの応募、『語用論研究』の投稿とも、会員に限るという規定がありますので、会員でない方は応募と同時にご入会下さい。学会のホームページを参照してください。

(2) 他学会との二重投稿はご遠慮下さい。特に、研究発表、ワークショップは同時期に行われる他学会との二重投稿はご遠慮ください。また、研究発表と『語用論研究』へ同時に同じ内容を応募するのも、お控え願えたらと思います。『語用論研究』への応募は、活字になっていないもので、語用論学会の研究発表やワークショップで発表したもの、あるいは他学会ですでに発表したものなどを歓迎します。

(3) 研究発表、ワークショップへの応募の要旨と、『語用論研究』への応募原稿は、ご本人と分かるような書き方はできる限り避ける。また、『語用論研究』への応募原稿の段階では、「・・・学会で発表したものである」とのような謝辞などは書かないようにお願いします。掲載決定後にはお書きいただいて結構です。

なお、上記の案内は『月刊言語』（7月号）『英語青年』（7月号）『日本語学』（7月号）に掲載の予定です。

★学会費の払い込み

このニューズレターとともに 2004 年度会費(4,000 円)の振替用紙が同封されています。この用紙でお早めに振り込み下さいますようお願いいたします。振替用紙が、2枚入っている方は昨年度分の会費が未納の

方ですので、学会の会計をご理解の上併せてお払い下さい。2年連続して会費を未納されますと、会員の資格を失効します。なお、住所・所属に変更や移動のある方は、事務局宛にメールあるいは郵送でご連絡ください。振り込み用紙の通信欄に書くのはなるべくお控えください（文字がかすれて読めないことがあります）。なお、行き違いがある場合はご容赦下さるようお願いいたします。

★第7回大会のシンポジウム

日本語用論学会第7回大会のシンポジウムは「ジェンダーと語用論一記号論、エスノメソドロジー、批判的談話分析からの提言」のテーマで行われる予定です。

講師：中村桃子（関東学院大学）、山崎敬一（埼玉大学）・山崎晶子（公立はこだて未来大学）、小倉孝誠（慶応大学）どうぞご期待下さい。

★学会の規約改正について

日本語用論学会のいっそうの発展とスムーズな運営を期して、学会の規約の改正を行いました。昨年度大会の総会で了承されました。詳しくは次号の『予稿集』または、『語用論研究』をご参照下さい。

★語用論関係の新刊書紹介

Horn, L.R. and G. Ward (eds.) (2004) *The Handbook of Pragmatics*. Oxford: Blackwell.

Wierzbicka, A. (2003) *Cross-Cultural Pragmatics*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Recanati, F. (2004) *Literal Meaning*.

- Cambridge: Cambridge University Press.
- Levinson, S.C. (2003) *Space in Language and Cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gauker, C. (2003) *Words without Meaning*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Dascal, M. (2003) *Interpretation and Understanding*. Amsterdam: John Benjamins.
- Blutner, R. and H. Zeevat (eds.) (2004) *Optimality Theory and Pragmatics*. New York: Palgrave Macmillan.
- 大堀壽夫(編)(2004)『シリーズ認知言語学入門・第6巻・認知コミュニケーション論』東京:大修館書店.
- ヘレン・スペンサー=オーティ(Helen Spencer-Oatey) (編集) 浅羽 亮一 (監修) 田中 典子・津留崎毅・鶴田庸子・熊野真理・福島佐江子 (訳) (2004)『異文化理解の語用論—理論と実践 (Culturally Speaking: Managing Rapport through Talk across Cultures)』東京: 研究社.

の綱は細くなっていました。10年以上も前の spaghetti champignon は spaghetti と champignon がほどよく一体化した絶品でした、また、5年前のそれは、すくなくとも spaghetti と champignon が共に調理され食材のよさを引き出しておりました。しかし、今回のそれは spaghetti avec champignon すなわち、別皿の champignon をトッピングにしたものでありました。言わば、料理における文法化の逆行でありましょうか。10年以上の間にシェフが代替わりし、かような次第になったのでしょうか。さて、私の講演は、「文法化」に即したものであったか、それとも、逆行したものであったか、それは読者の想像にお任せします。ただ、ワインが助けになったことは確かです。

★ 編集後記

本年より、事務局長が澤田治美氏より林 宅男氏に変わりました。またそれに伴い、事務局も関西外国語大学から桃山学院大学に移りました。

(広報委員 久保 進 記)

★ Forum

文法化は spaghetti にも通じる一般原理?

久保 進 (松山大学)

Daniel Vanderveken 博士の計らいによるものですが、4月の初めに1週間ほどカナダのケベック大学の哲学科で招聘講演をする機会がありました。講演当日までに、何人もの研究者とやりあっていたので、当日には、相当疲労が蓄積し、頼みの綱は Pacini の spaghetti champignon と白ワインのみでありました。ところが、その頼み